

阿部一族

森鷗外

青空文庫

従四位下左近衛少将兼越中守細川忠利は、寛

永十八年辛巳の春、よそよりは早く咲く領地肥後国の花を見す

てて、五十四万石の大名の晴れ晴れしい行列に前後を囲ませ、南

より北へ歩みを運ぶ春とともに、江戸を志して参勤の途に上る

うとしてゐるうち、はからず病にかかつて、典医の方剤も功を奏

せず、日に増し重くなるばかりなので、江戸へは出発日延べの飛

脚が立つ。徳川將軍は名君の誉れの高い三代目の家光で、島原一

揆のとき賊将天草四郎時貞を討ち取つて大功を立てた忠利の

身の上を気づかい、三月二十日には松平伊豆守、阿部豊後

守、阿部対馬守の連名の沙汰書を作らせ、針医以策というも

のを、京都から下向げこうさせる。続いて二十二日には同じく執政三人の署名した沙汰書を持たせて、曾我そが又左衛門またざえもんという侍さむらいを上使さむらいにつかわす。大名に対する將軍家の取扱ていいとしては、鄭てい重ちゆうをきわめたものであつた。島原征伐がこの年から三年前寛永十五年の春平定してからのち、江戸の邸やしきに添地そえちを賜たまわつたり、鷹狩たかがりの鶴つるを下くだされたり、ふだん慇懃いんぎんを尽くしていた將軍家のことであるから、このたびの大病を聞いて、先例の許す限りの慰問をさせたのも尤もつともである。

將軍家がこういう手続きをする前に、熊本花畑やかたの館やかたでは忠利の病すみやが革すみやかになつて、とうとう三月十七日申さるの刻ときに五十六歳で亡ななつた。奥方は小笠原おがさわら兵部ひょうぶ大輔だいほ秀政ひでまさの娘を將軍が養女にし

て妻めあわせた人で、今年四十五歳になっている。名をお千せんの方かたという。
 嫡ちやくし子六丸は六年前に元服して將軍家から光みつの字を賜わり、光みつ
 貞だと名のつて、従四位下侍じじゆう 従兼肥後守ひごのかみにせられている。今
 年十七歳である。江戸參勤中で遠と江お国とうみ浜松まで歸つたが、
 訃音ふいんを聞いて引き返した。光貞はのち名を光尚みつひさと改めた。二男
 鶴千代つるちよは小さいときから立田山の泰勝寺たいしょうじにやつてある。京都妙
 心寺出身の大淵たいえん和尚おしょうの弟子になつて宗玄といつてゐる。三男
 松之助は細川家に旧縁のある長岡氏に養われている。四男勝千代
 は家臣南条大膳だいぜんの養子になつてゐる。女子は二人ある。長女藤ふ
 姫じひめは松平周防守すおうのかみ 忠弘ただひろの奥方になつてゐる。二女竹姫はのち
 に有あり吉頼母英長よしたのもひでながの妻になる人である。弟には忠利さんさいが三齋さんさいの

三男に生まれたので、四男中なかつかさ務大輔立孝、五男刑部興ぎようぶおきた孝、六男長岡式部寄之よりゆきの三人がある。妹には稲葉一通かずみちに嫁した多羅姫たらひめ、鳥丸からすまる中納言光賢ちゆうなごんみつかたに嫁した万姫まんひめがある。この万姫の腹に生まれた禰々姫ねねひめが忠利の嫡子光尚の奥方になって来るのである。目上には長岡氏を名のる兄が二人、前野長岡両家に嫁した姉が二人ある。隠居三斎宗そうりゆう立もまだ存命で、七十九歳になっている。この中には嫡子光貞のように江戸にいたり、また京都、そのほか遠国にいる人だちもあるが、それがのちに知らせを受けて歎なげいたのと違って、熊本の館やかたにいた限りの人だちの歎きは、わけて痛切なものであった。江戸への注進むつしましには六島少吉しょうきち、津田六左衛門の二人が立った。

三月二十四日には初七日しよなぬかの営みがあつた。四月二十八日にはそれまで館の居間の床板とこいたを引き放つて、土中に置いてあつた棺かんを昇かき上げて、江戸からの指図さしずによつて、飽田郡春日村岫あきたごおりかすがむらしゆう雲院うんいんで遺骸いがいを茶だびにして、高麗門こうらいもんの外の山に葬つた。この靈屋みたまやの下に、翌年の冬になつて、護国山ごこくざん妙解寺みようげじが建立こんりゆうせられて、江戸品川東海寺から沢庵たくあんおしよう和尚わしやうの同門の啓室和尚けいしつわしやうが来て住持になり、それが寺内の臨流庵りんりゆうあんに隠居してから、忠利の二男で出家していた宗玄そうげんが、天岸和尚てんがんわしやうと号して跡つぎになるのである。忠利の法号は妙解院みようげいんでん殿でん、台雲宗伍大居士たいうんそうごだいこじとつけられた。

岫雲院しゆんいんで茶だびになつたのは、忠利の遺言によつたのである。い

つのことであつたか、忠利が方目狩ほんがりに出て、この岫雲院で休んで茶を飲んだことがある。そのとき忠利はふと腮髯あごひげの伸びているのに気がついて住持に剃刀かみそりはないかと言つた。住持が盥たらひに水を取つて、剃刀を添えて出した。忠利は機嫌きげんよく児小姓こごしやうに髯を剃そらせながら、住持に言つた。「どうじやな。この剃刀では亡者もうじやの頭をたくさん剃つたであらうな」と言つた。住持はなんと返事をしていいかわからぬので、ひどく困つた。このときから忠利は岫雲院の住持と心安くなつていたので、茶だびしよ所をこの寺にきめたのである。ちようど茶ひつぎの最中であつた。柩ひつぎの供をして来ていた家臣たちの群れに、「あれ、お鷹がお鷹が」と言う声が出た。境け内いだいの杉すぎの木立ちに限られて、鈍い青色をしている空の下、円形

の石の井筒いづつの上に笠かさのように垂れかかっている葉桜の上の方に、二羽の鷹が輪をかいて飛んでいたのである。人々が不思議がつて見ているうちに、二羽が尾くちばしと嘴くちばしと触れるようにあとさきに続いて、さつと落して来て、桜の下の井の中にはいった。寺の門前でしばらく何かを言い争っていた五六人の中から、二人の男が駈かけ出して、井の端はたに来て、石の井筒に手をかけて中をのぞいた。そのとき鷹は水底深く沈んでしまつて、齒し朶だの茂みの中に鏡のように光っている水面は、もうもとの通りに平らになつていた。二人の男は鷹たか匠しょう衆しゅうであつた。井の底にくぐり入つて死んだのは、忠利が愛していた有明ありあけ、明石あかしという二羽の鷹であつた。そのことがわかつたとき、人々の間に、「それではお鷹も殉じゆん死ししたのか」

とささやく声が聞えた。それは殿様がお隠れになつた当日から一お昨日とつまでに殉死した家臣が十余人あつて、中にも一昨日は八人一お時に切腹し、昨日きのうも一人切腹したので、家中かちゆうたれ誰一人にん殉死のことを思わずにいるものはなかつたからである。二羽の鷹はどういう手ぬかりで鷹匠衆の手を離れたか、どうして目に見えぬ獲物えものを追うように、井戸の中に飛び込んだか知らぬが、それを穿鑿せんさくしようなどと思うものは一人もない。鷹は殿様のご寵ちようあい愛あいなされたもので、それが茶の当日に、しかもお茶所の岫雲院の井戸にはいつて死んだというだけの事実を見て、鷹が殉死したのだという判断をするには十分であつた。それを疑つて別に原因を尋ねようとする余地はなかつたのである。

中陰の四十九日が五月五日に済んだ。これまでは宗玄をはじめ
 として、既きせい西堂、金こんり両堂、天てんじ授庵、聽ちようし松院、不ふじ二
 庵あん等の僧そうり侶よが勤ごんぎ行ようをしていたのである。さて五月六日にな
 ったが、まだ殉死する人がぼつぼつある。殉死する本人や親兄弟
 妻子は言うまでもなく、なんの由ゆかり縁ゆかりもないものでも、京都から来
 るお針医と江戸から下る御上使との接待の用意なんぞはうわの空
 でして、ただ殉死のことばかり思っている。例年のき簷ふに葺ふく端
 午しやうぶの菖蒲つも摘つまず、ましてや初はつ幟のぼりの祝をする子のある家も、
 その子の生まれたことを忘れたようにして、静まり返っている。
 殉死にはいつどうしてきまつたともなく、自然おきてに掟おきてが出来てい

る。どれほど殿様を大切に思えばと行って、誰でも勝手に殉死が出来るものではない。泰平たいへいの世の江戸参勤のお供、いざ戦争と
いうときの陣中へのお供と同じことで、死天しでの山三途さんずの川のお供
をするにもぜひ殿様のお許しを得なくてはならない。その許しも
ないのに死んでは、それは犬死いぬじにである。武士は名聞みょうもんが大切
だから、犬死はしない。敵陣に飛び込んで討死うちじにをするのは立派
ではあるが、軍令にそむいて拔駈ぬけがけをして死んでは功にはならな
い。それが犬死であると同じことで、お許しのないに殉死しては、
これも犬死である。たまにそういう人で犬死にならないのは、値ち
遇ぐうを得た君臣の間に默契があつて、お許しはなくてもお許しがあ
つたのと変らぬのである。仏涅槃ぶつねはんののちに起つた大乘の教えは、

仏のお許しはなかつたが、過現未を通じて知らぬことのない仏は、
 そういふ教えが出て来るものだとして知つて懸許しておいたものだ
 としてある。お許しがないのに殉死の出来るのは、金口で説かれ
 ると同じように、大乘の教えを説くようなものであらう。

そんならどうしてお許しを得るかというところ、このたび殉死した
 人々の中の内藤長十郎元統が願つた手段などがよい例である。

長十郎は平生忠利の机廻りの用を勤めて、格別のご懇意をこう
 むつたもので、病床を離れずに介抱をしていた。もはや本復は覚
 束ないと、忠利が悟つたとき、長十郎に「末期が近うなつたら、
 あの不二と書いてある大文字の懸物を枕もとにかけてくれ」と
 言いつけておいた。三月十七日に容態が次第に重くなつて、忠利

が「あの懸物をかけえ」と言った。長十郎はそれをかけた。忠利はそれを一目見て、しばらく瞑目めいもくしていた。それから忠利が「足がだるい」と言った。長十郎は搔卷かいまきの裾すそをしずかにまくつて、忠利の足をさすりながら、忠利の顔をじつと見ると、忠利もじつと見返した。

「長十郎お願いがござりまする」

「なんじゃ」

「ご病気はいかにもご重体のようにはお見受け申しまするが、神仏の加護良薬の功験で、一日も早うご全快遊ばすようにと、祈願いたしております。それでも万一と申すことがござりまする。もしものことがござりましたら、どうぞ長十郎奴めにお供を仰せつ

けられますように」

こう言いながら長十郎は忠利の足をそつと持ち上げて、自分の額ひたいに押し当てて戴いた。目には涙が一ぱい浮かんでいた。

「それはいかんぞよ」こう言つて忠利は今まで長十郎と顔を見合わせていたのに、半分寝返りをするように脇わきを向いた。

「どうぞそうおっしゃらずに」長十郎はまた忠利の足を戴いた。

「いかんいかん」顔をそむけたままで言つた。

列座の者の中から、「弱輩の身をもつて推参じゃ、控えたらよかろう」と言つたものがある。長十郎は当年十七歳である。

「どうぞ」咽のどにつかえたような声で言つて、長十郎は三度目に戴いた足をいつまでも額に当てて放さずにいた。

「情の剛い奴じやな」声はおこつて叱るようであつたが、忠利はこの詞とともに二度うなずいた。

長十郎は「はっ」と言つて、両手で忠利の足を抱えたまま、床の背後に俯伏して、しばらく動かずにいた。そのとき長十郎の心のうちには、非常な難所を通つて往き着かなくてはならぬ所へ往き着いたような、力の弛みと心の落着きとが満ちあふれて、そのほかのことは何も意識に上らず、備後置の上に涙のこぼれるのも知らなかつた。

長十郎はまだ弱輩で何一つきわだつた功績もなかつたが、忠利は始終目をかけて側近く使つていた。酒が好きで、別人なら無礼のお咎めもありそうな失錯をしたことがあるのに、忠利は

「あれは長十郎がしたのではない、酒がしたのじゃ」と言つて笑つていた。それでその恩に報いなくてはならぬ、その過ちあやまを償つくわなくてはならぬと思ひ込んでいた長十郎は、忠利の病氣が重おもつてからは、その報謝と賠償との道は殉死のほかないとかたく信ずるようになった。しかし細かにこの男の心中に立ち入つてみると、自分の発意で殉死しなくてはならぬという心持ちのかたわら、人が自分を殉死するはずのものだと思つてに違ひないから、自分自分は殉死を余儀なくせられて、人にすがつて死の方向へ進んでいくような心持ちが、ほとんど同じ強さに存在していた。反面から言うと、もし自分が殉死せずにいたら、恐ろしい屈辱を受けるに違ひないと心配していたのである。こういう弱みのある長

十郎ではあるが、死を怖れる念は微塵もない。それだからどうぞ殿様に殉死を許して戴こうという願望は、何物の障礙をもこうむらずにこの男の意志の全幅を領していたのである。

しばらくして長十郎は両手で持つてゐる殿様の足に力がはいつて少し踏み伸ばされるように感じた。これはまただるくおなりになつたのだと思つたので、また最初のようにしずかにさすり始めた。このとき長十郎の心頭には老母と妻とのことが浮かんた。そして殉死者の遺族が主家の優待を受けるといふことを考えて、それで己は家族を安穩な地位において、安んじて死ぬることが出来ると思つた。それと同時に長十郎の顔は晴れ晴れした気色になつた。

四月十七日の朝、長十郎は衣服を改めて母の前に出て、はじめて殉死のことを明かして暇いとまご乞こいをした。母は少しも驚かなかつた。それは互いに口に出しては言わぬが、きようは倅せがれが切腹する日だと、母もとうから思っていたからである。もし切腹しないとでも言ったら、母はさぞ驚いたことであろう。

母はまだもらつたばかりのよめが勝手にいたのをその席へ呼んでただ支度が出来たかと問うた。よめはすぐに起たつて、勝手からかねて用意してあつた杯盤を自身に運んで出た。よめも母と同じように、夫がきよう切腹するということをとうから知っていた。髪を綺麗きれいに撫なでつけて、よい分のふだん着に着換えている。母も

よめも改まった、真面目な顔をしているのは同じことであるが、ただよめの目の縁が赤くなっているのです、勝手にいたとき泣いたことがわかる。杯盤が出ると、長十郎は弟左平次を呼んだ。

四人は黙って杯を取り交わした。杯が一順したとき母が言った。「長十郎や。お前の好きな酒じゃ。少し過してはどうじゃな」

「ほんにそうでござりまするな」と言つて、長十郎は微笑を含んで、心地よげに杯を重ねた。

しばらくして長十郎が母に言った。「よい心持ちに酔いました。先日からかれこれと心づかいをいたしましたせいか、いつもより酒が利いたようでござります。ご免をこうむつてちよつと一休みいたしましょう」

こう言つて長十郎は起つて居間にはいったが、すぐに部屋の真ん中に転がつて、いびき 鼾をかきだした。女房があとからそつとはいつて枕を出して当てさせたとき、長十郎は「ううん」とうなつて寝返りをしただけで、また鼾をかき続けている。女房はじつと夫の顔を見ていたが、たちまちあわてたように起つて部屋へ往つた。泣いてはならぬと思つたのである。

家はひっそりとしている。ちようど主人の決心を母と妻とが言わずに知つていたように、家来も女中も知つていたので、勝手からもうまや 厩の方からも笑い声などは聞こえない。

母は母の部屋に、よめはよめの部屋に、弟は弟の部屋に、じつと物を思っている。主人は居間で鼾をかいて寝ている。あけ放つ

である居間の窓には、下に風鈴をつけた吊つり葱しのぶが吊つてある。

その風鈴が折り折り思い出したようにかすかに鳴る。その下には丈たけの高い石いの頂ただきを掘りくぼめた手水鉢ちようずばちがある。その上に伏せてある捲物まきものの柄杓ひしやくに、やんまが一疋びき止まって、羽を山形に垂れて動かずにいる。

一ひと時とき立つ。二ふた時とき立つ。もう午ひるを過ぎた。食事の支度は女中

に言いつけてあるが、姑しゅうとめが食くべると言われるか、どうだかわからぬと思つて、よめは聞きに行こうと思ひながらためらつていた。

もし自分だけが食事のことなぞを思うように取られはすまいかのためらつていたのである。

そのときかねて介かい錯しやくを頼まれていた関小平次が来た。姑は

よめを呼んだ。よめが黙って手をついて機嫌を伺っていると、姑が言った。

「長十郎はちよつと一休みすると言うたが、いかい時が立つような。ちようど関殿も来られた。もう起こしてやってはどうじやろうの」

「ほんにそうでござります。あまり遅くなりません方が」よめはこう言つて、すぐに起つて夫を起しに往つた。

夫の居間に来た女房は、さきに枕をさせたときと同じように、またじつと夫の顔を見ていた。死なせに起すのだと思うので、しばらくは詞ことばをかけかねていたのである。

熟睡していても、庭からさす昼の明りがまばゆかったと見えて、

夫は窓の方を背にして、顔をこつちへ向けている。

「もし、あなた」と女房は呼んだ。

長十郎は目をさまさない。

女房がすり寄って、そびえている肩に手をかけると、長十郎は「あ、ああ」と言つて臂ひじを伸ばして、両眼を開いて、むつくり起きた。

「たいそうよくお休みになりました。お袋さまがあまり遅くなり
はせぬかとおっしゃりますから、お起し申しました。それに関様
がおいでになりました」

「そうか。それでは午ひるになつたと見える。少しの間だと思つたが、
酔つたのと疲れがあつたので、時の立つのを知らずにいた。そ

の代りひどく気分がよくなった。茶漬ちやづけでも食べて、そろそろ東光院へ往かずばなるまい。お母かあさまにも申し上げてくれ」

武士はいざというときには飽ほう食しょくはしない。しかしまた空腹で大切なことに取りかかることもない。長十郎は実際ちよつと寝ようと思つたのだが、覚えぬ気持よく寝過し、午ひるになつたと聞いたので、食事をしようと言つたのである。これから形かたばかりではあるが、一家いっけ四人のものがふだんのように膳ぜんに向かつて、午の食事をした。

長十郎は心静かに支度をして、関を連れて菩提ぼだい所しよ東光院へ腹を切りに往つた。

長十郎が忠利の足を戴いて願ったように、平生恩顧を受けていた家臣のうちで、これと前後して思い思いに殉死の願いをして許されたものが、長十郎を加えて十八人あつた。いずれも忠利の深く信頼していた侍どもである。だから忠利の心では、この人々を子息みつひさ光尚の保護のために残しておきたいことは山々であつた。またこの人々を自分と一しよに死なせるのが残ざんこく刻だとは十分感じていた。しかし彼ら一人一人に「許す」という一言を、身を割さくように思いながら与えたのは、勢いやむことを得なかつたのである。

自分の親しく使っていた彼らが、命を惜しまぬものであるとは、忠利は信じている。したがって殉死を苦痛とせぬことも知つてい

る。これに反してもし自分が殉死を許さずにおいて、彼らが生きながらえていたら、どうであろうか。家かちゆう中ちゆう一同は彼らを死ぬべきときに死なぬものとし、恩知らずとし、卑怯者ひきようものとしてともによわい齒はせぬであろう。それだけならば、彼らもあるいは忍んで命を光尚に捧げるときの来るのを待つかも知れない。しかしその恩知らず、その卑怯者をそれと知らずに、先代の主人が使っていたのだと言うものがあつたら、それは彼らの忍び得ぬことであろう。彼らはどんなにか口惜しい思いをするであろう。こう思つてみると、忠利は「許す」と言わずにはいられない。そこで病苦にも増したせつない思いをしながら、忠利は「許す」と言つたのである。

殉死を許した家臣の数が十八人になつたとき、五十余年の久し

い間治乱のうちにも身を処して、人情世故せいこにあくまで通じていた忠利は病苦の中にも、つくづく自分の死と十八人の侍の死について考えた。生しょうあるものは必ず滅する。老木の朽ち枯れるそばで、若木は茂り榮えて行く。嫡ちやくし子光尚わかもの周囲にいる少壯者どもから見れば、自分の任用している老成人としよりらは、もういなくてよいのである。邪魔にもなるのである。自分は彼らを生きながらえさせて、自分にしたと同じ奉公を光尚にさせたいと思うが、その奉公を光尚にするものは、もう幾人も出来ていて、手ぐすね引いて待つているかも知れない。自分の任用したものは、年来それぞれの職分を尽くして来るうちに、人の怨うらみをも買つていよう。少くも娼そねみ嫉あの的になつてゐるには違ひない。そうしてみれば、強しいて彼らに

ながらえているというのは、通達した考えではないかも知れない。殉死を許してやったのは慈悲であつたかも知れない。こう思つて忠利は多少の慰藉いしやを得たような心持ちになつた。

殉死を願つて許された十八人は寺本八左衛門直次なおつぐ、大塚喜兵

衛種次たねつぐ、内藤長十郎元統もとつぐ、太田小十郎正信、原田十次郎之

直お、宗像加兵衛景定かげさだ、同吉太夫景好かげよし、橋谷市蔵重次しげつぐ、

井原十三郎吉正よしまさ、田中意徳、本庄喜助重正しげまさ、伊藤太左衛門方

高さたか、右田因幡統安いなばむねやす、野田喜兵衛重綱しげつな、津崎五助長季ながすえ、小

林理右衛門行秀ゆきひで、林与左衛門正定まささだ、宮永勝左衛門宗佑むねすけの人

々である。

寺本が先祖は尾張おわりのくに国寺本に住んでいた寺本太郎というものであつた。太郎の子内膳ないぜんのしょう正は今川家に仕えた。内膳正の子が左兵衛、左兵衛の子が右衛門うえもん佐、右衛門佐の子が与左衛門で、与左衛門は朝鮮征伐のとき、加藤嘉明よしあきに属して功があつた。与左衛門の子が八左衛門で、大阪籠城ろうじょうのとき、後藤基次もとつぐの下で働いたことがある。細川家に召し抱めえられてから、千石取つて、鉄砲五十挺ちようかしちの頭になつていた。四月二十九日に安養寺で切腹した。五十三歳である。藤本猪左衛門いざえもんが介錯かいしゃくした。大塚は百五十石取りの横目役よこめやくである。四月二十六日に切腹した。介錯は池田八左衛門であつた。内藤がことは前に言つた。太田は祖父伝左衛門が加藤清正に仕えていた。忠広ほうが封を除かれたとき、伝左衛門と

その子の源左衛門とが流浪した。小十郎は源左衛門の二男で児こごし小姓しょうに召し出された者である。百五十石取っていた。殉死せんの先せん登とうはこの人で、三月十七日に春日寺かすがでらで切腹した。十八歳である。介錯は門司源兵衛がした。原田は百五十石取りで、お側に勤そばめていた。四月二十六日に切腹した。介錯は鎌田源太夫がした。宗像加兵衛、同吉太夫きちだゆうの兄弟は、宗像中納言氏うちさだ貞ちかの後裔こうえいで、親清兵衛景延かげのぶの代に召し出された。兄弟いずれも二百石取りである。五月二日に兄は流長院、弟は蓮政寺れんしやうじで切腹した。兄の介錯は高田十兵衛、弟のは村上市右衛門がした。橋谷は出雲国いずものくにの人で、尼子あまこの末流まつりゆうである。十四歳のとき忠利に召し出されて、知行百石の側役そばやくを勤め、食事の毒味をしていた。忠利は病が重

くなつてから、橋谷の膝ひざを枕にして寝たこともある。四月二十六日に西岸寺で切腹した。ちようど腹を切ろうとすると、城の太鼓がかすかに聞えた。橋谷はついて来ていた家隸けらいに、外へ出て何なんど時きか聞いて来いと言つた。家隸は帰つて、「しまいの四つだけは聞きましたが、総体の桴ばち数かずはわかりません」と言つた。橋谷をはじめとして、一座の者が微笑ほほえんだ。橋谷は「最期さいごによう笑わせてくれた」と言つて、家隸に羽織を取らせて切腹した。吉村きちむら甚じんだゆう
太夫たゆうが介錯けさくした。井原は切きり米まい三人扶持ふち十石を取つていた。切腹したとき阿部弥一やいちえもん右衛門の家隸林左兵衛が介錯した。田中は阿おきくものがたり
菊物語を世に残したお菊が孫で、忠利が愛宕山あたごさんへ学問に往つたときの幼な友達であつた。忠利がそのころ出家しようとした

のを、ひそかに諫めたことがある。のちに知行二百石の側役を勤め、算術が達者で用に立つた。老年になつてからは、君前で頭巾ずきんをかむつたまま安座することを免ゆるされていた。当代に追腹おいばらを願つても許されぬので、六月十九日に小脇差こわきざしを腹に突き立ててから願書を出して、とうとう許された。加藤安太夫が介錯した。本庄は丹後国たんごのくにの者で、流浪していたのを三斎公の部屋附ほんじよき本庄うきゆうえもん久右衛門が召使つていた。仲津で狼藉ろうぜきもの者を取り押さえて、五人扶持十五石の切米きりまいと取りにせられた。本庄を名のつたのもそのときからである。四月二十六日に切腹した。伊藤は奥納戸おくおなんどや役くを勤めた切米取りである。四月二十六日に切腹した。介錯は河喜多八助かわきたがした。右田はおおもとけ大伴家の浪人で、忠利に知行百石で

召し抱えられた。四月二十七日に自宅で切腹した。六十四歳である。松野右京の家隸田原勘兵衛が介錯した。野田は天草の家老野田美濃の倅で、切米取りに召し出された。四月二十六日に源覚寺で切腹した。介錯は恵良半衛門がした。津崎のことは別に書く。小林は二人扶持十石の切米取りである。切腹のとき、高野勘右衛門が介錯した。林は南郷下田村の百姓であつたのを、忠利が十人扶持十五石に召し出して、花畑の館の庭方にした。四月二十六日に仏巖寺で切腹した。介錯は仲光半助がした。宮永は二人扶持十石の台所役人で、先代に殉死を願つた最初の男であつた。四月二十六日に浄照寺で切腹した。介錯は吉村嘉右衛門がした。この人々の中にはそれぞれの家の菩提所に葬られたのもあ

るが、また高麗門こうらいもんがい外の山中にある靈屋おたまやのそばに葬られたのもある。

切米取りの殉死者はわりに多人数であつたが、中にも津崎五助の事蹟は、きわだつて面白いから別に書くことにする。

五助は二人扶持六石の切米取りで、忠利の犬牽いぬひきである。いつも鷹狩の供をして野方のかたで忠利の氣に入つていた。主君にねだるようにして、殉死のお許しは受けたが、家老たちは皆言つた。「ほかの方々こうろくは高禄こうろくを賜わつて、榮耀えようをしたのに、そちは殿様のお犬牽きではないか。そちが志は殊勝で、殿様のお許しが出たのは、この上もない誉ほまれじゃ。もうそれでよい。どうぞ死ぬることだけは思い止まつて、御当主にご奉公してくれい」と言つた。

五助はどうしても聴かずに、五月七日にいつも牽ひいてお供をした犬を連れて、追廻おいまわしたはた田畑こうりんじの高琳寺へ出かけた。女房は戸口まで見送りに出て、「お前も男じゃ、お歴々の衆に負けぬようにおしなされい」と言った。

津崎の家では往生院おうじょういんを菩提所かみにしていたが、往生院は上のご由緒ゆいしよのあるお寺だというのではばかつて、高琳寺を死しにどころ所かみときめたのである。五助が墓地にはいつてみると、かねて介錯を頼んでおいた松野縫殿助ぬいのすけが先に来て待つていた。五助は肩にかけた浅葱あさぎの囊ふくろをおろしてその中から飯行李めしこうりを出した。蓋ふたをあけると握り飯が二つはいつている。それを犬の前に置いた。犬はすぐに食おうともせず、尾をふつて五助の顔を見ていた。五助は人

間に言うように犬に言った。

「おぬしは畜生じやから、知らずにおるかも知れぬが、おぬしの頭をさすつて下されたことのある殿様は、もうお亡くなり遊ばされた。それでご恩になつていなされたお歴々は皆きよう腹を切つてお供をなさる。おれは下司げすではあるが、御扶持ごふちを戴いてつないだ命はお歴々と変つたことはない。殿様にかわいがつて戴いたありがたさも同じことじや。それでおれは今腹を切つて死ぬるのじや。おれが死んでもうたら、おぬしは今から野ら犬になるのじや。おれはそれがかわいそうでならん。殿様のお供をした鷹は岫し雲ゆうん院いんで井戸に飛び込んで死んだ。どうじや。おぬしもおれと一しよに死のうとは思わんかい。もし野ら犬になつても、生きて

いたいと思うたら、この握り飯を食つてくれい。死にたいと思うなら、食うなよ」

こう言つて犬の顔を見ていたが、犬は五助の顔ばかりを見ていて、握り飯を食おうとはしない。

「それならおぬしも死ぬるか」と言つて、五助は犬をきつと見つめた。

犬は一ひとこえ声鳴いて尾をふつた。

「よい。そんなら不ふびん便じゃが死んでくれい」こう言つて五助は犬を抱き寄せて、脇差を抜いて、一刀に刺した。

五助は犬の死骸をかたわらへ置いた。そして懐中から一枚の書き物を出して、それを前にひろげて、小石を重りにして置いた。

誰やらの邸やしきで歌の会のあつたとき見覚えた通りに半紙を横に二つに折つて、「家老衆はとまれとまれと仰せあれどとめてとまらぬこの五助哉かな」と、常の詠草のように書いてある。署名はしてない。歌の中に五助としてあるから、二重に名を書かなくてもよいと、すなおに考えたのが、自然に故実になつていた。

もうこれで何も手落ちはないと思つた五助は「松野様、お頼み申します」と言つて、安座あんざして肌はだをくつろげた。そして犬の血のついたままの脇差わきざしを逆手さかてに持つて、「お鷹たか匠じょう衆しゆうはどうなさりましたな、お犬牽いぬひきは只ただ今いま参りますぞ」と高たか声こゑに言つて、一声快こころよげに笑つて、腹を十文字に切つた。松野が背後うしろから首を打つた。

五助は身分の軽いものではあるが、のちに殉死者の遺族の受けたほどの手当は、あとに残った後家が受けた。男子一人は小さいとき出家していたからである。後家は五人扶持をもらい、新たに家屋敷をもらって、忠利の三十三回忌のときまで存命していた。五助の甥の子が二代の五助となつて、それからは代々ふれぐみ触組で奉公していた。

ちのぶ 忠利の許しを得て殉死した十八人のほかに、阿部弥一右衛門通み信というものがあつた。初めは明石氏あかしうじで、幼名を猪之助いのすけといつた。はやくから忠利の側そば近く仕えて、千百石余の身分になつている。島原征伐のとき、子供五人のうち三人まで軍功によつて

新知二百石ずつをもらった。この弥一右衛門は家中でも殉死するはずのように思い、当人もまた忠利の夜伽よとぎに出る順番が来るたびに、殉死したいと言って願った。しかしどうしても忠利は許さない。「そちが志は満足に思うが、それよりは生きていて光尚みつひさに奉公してくれい」と、何度願っても、同じことを繰り返して言うのである。

一体忠利は弥一右衛門の言うことを聴かぬ癖がついている。これはよほど古くからのことで、まだ猪之助といって小姓を勤めていたころも、猪之助が「ご膳ぜんを差し上げましょうか」と伺うと、「まだ空腹にはならぬ」と言う。ほかの小姓が申し上げると、「よい、出させい」と言う。忠利はこの男の顔を見ると、反対し

たくなるのである。そんなら叱られるかというのと、そうでもない。この男ほど精勤をするものはなく、万事に気がついて、手ぬかりがないから、叱ろうといつても叱りようがない。

弥一右衛門はほかの人の言いつけられてすることを、言いつけられずにする。ほかの人の申し上げてすることを申し上げずにする。しかしすることはいつも肯綮こうけいにあたつていて、間然すべきところがない。弥一右衛門は意地ばかりで奉公して行くようになってゐる。忠利は初めなんとも思わずに、ただこの男の顔を見ると、反対したくなつたのだが、のちにはこの男の意地で勤めるのを知つて憎いと思つた。憎いと思ひながら、聡明そうめいな忠利はなぜ弥一右衛門がそうなつたかと回想して見て、それは自分がしむけ

たのだということに気がついた。そして自分の反対する癖を改めようと思っていながら、月がかさなり年がかさなるにしたがつて、それが次第に改めにくくなつた。

人には誰が上にも好きな人、いやな人というものがある。そしてなぜ好きだか、いやだかと穿鑿してみると、どうかすると捕捉するほどの拠りどころがない。忠利が弥一右衛門を好かぬのも、そんなわけである。しかし弥一右衛門という男はどこかに人と親しみがたいところを持っているに違いない。それは親しい友達の少いのでわかる。誰でも立派な侍として尊敬はする。しかしたやすく近づこうと試みるものがない。まれに物ずきに近づこうと試みるものがあつても、しばらくするうちに根気が続かなくなつて

遠ざかってしまう。まだ猪之助といつて、前髪のあつたとき、たびたび話をしかけたり、何かに手を借かしてやつたりしていた年上の男が、「どうも阿部にはつけ入る隙ひまがない」と言つて我がを折つた。そこらを考えてみると、忠利が自分の癖を改めたく思いながら改めることの出来なかつたのも怪しむに足りない。

とにかく弥一右衛門は何度願つても殉死の許しを得ないでいるうちに、忠利は亡くなった。亡くなる少し前に、「弥一右衛門奴めはお願いと申すことを申したことはござりません、これが生しょう涯が唯いゆい一つのお願いでござります」と言つて、じつと忠利の顔を見ていたが、忠利もじつと顔を見返して、「いや、どうぞ光尚に奉公してくれい」と言い放つた。

弥一右衛門はつくづく考えて決心した。自分の身分で、この場合に殉死せずに生き残って、家中のものに顔を合わせているということは、百人が百人所詮しよせん出来ぬことと思うだろう。犬死と知って切腹するか、浪人して熊本を去るかのほか、しかたがあるまい。だがおれはおれだ。よいわ。武士は妾めかけとは違ちがう。主しゆの氣に入らぬからといって、立場がなくなるはずはない。こう思つて一日と例のごとくに勤めていた。

そのうちに五月六日が来て、十八人のものが皆殉死した。熊本中ただその噂うわさばかりである。誰はなんと云つて死んだ、誰の死にようが誰よりも見事であつたという話のほかには、なんの話もない。弥一右衛門は以前から人に用事のほかの話をしかけられたこ

とは少かつたが、五月七日からこつちは、御殿の詰所に出ていて
みても、一層寂しい。それに相役が自分の顔を見ぬようにして見
るのがわかる。そつと横から見たり、背後うしろから見たりするのかわ
かる。不快でたまらない。それでもおれは命が惜しくて生きてい
るのではない、おれをどれほど悪く思う人でも、命を惜しむ男だ
とはまさかに言うことが出来まい、たつた今でも死んでよいのな
ら死んでみせると思うので、昂然こうぜんと項うなじをそらして詰所へ出て、
昂然と項をそらして詰所から引いていた。

二三日立つと、弥一右衛門が耳にけしからん噂が聞え出して来
た。誰が言い出したことか知らぬが、「阿部はお許しのないを幸
いに生きているとみえる、お許しはのうても追腹は切られぬはず

がない、阿部の腹の皮は人とは違ふとみえる、瓢箪ひょうたんに油でも塗つて切れればよいに」というのである。弥一右衛門は聞いて思ひのほかのことに思った。悪口が言いたくばなんとも言うがよい。しかしこの弥一右衛門をたて豎から見ても横から見ても、命の惜しい男とは、どうして見えようぞ。げに言えば言われたものかな、よいわ。そんならこの腹の皮を瓢箪に油を塗つて切つて見しよう。

弥一右衛門はその日詰所を引くと、急使をもつて別家している弟二人を山崎の邸に呼び寄せた。居間と客間との間の建具をはずさせ、嫡子ごんべえ権兵衛、二男やごべえ弥五兵衛、つぎにまだ前髪のある五男しちのじょう七之丞の三人をそばにおらせて、主人は威儀を正して待ち受けている。権兵衛は幼名権十郎といつて、島原征伐に立派な働きをし

て、新知二百石をもらっている。父に劣らぬ若者である。このたびのことについては、ただ一度父に「お許しは出ませなんだか」と問うた。父は「うん、出んぞ」と言った。そのほか二人の間にはなんの詞も交わされなかつた。親子は心の底まで知り抜いているので、何も言うにはおよばぬのであつた。

まもなく二張ふたはりの提燈ちようちんが門のうちにはいつた。三男市太いちだゆ夫う、四男五太夫ごだゆうの二人がほとんど同時に玄関に来て、雨具を脱いで座敷に通つた。中陰の翌日からじめじめとした雨になつて、五月さつき闌やみの空が晴れずにいるのである。

障子はあけ放してあつても、蒸し暑くて風がない。そのくせ燭し台よくだいの火はゆらめいている。螢ほたるが一匹庭の木立ちを縫つて通り

過ぎた。

一座を見渡した主人が口を開いた。「夜陰に呼びにやったのに、皆よう来てくれた。家かちゆう中一般の噂じやというから、おぬしたちも聞いたに違いない。この弥一右衛門が腹は瓢箪に油を塗って切る腹じやそうな。それじやによつて、おれは今瓢箪に油を塗って切ろうと思う。どうぞ皆で見届けてくれい」

市太夫も五太夫も島原の軍功で新知二百石をもらつて別家しているが、中にも市太夫は早くから若殿附きになつていたので、御代替りになつて人に羨うらやまれる一人である。市太夫が膝ひざを進めた。

「なるほど。ようわかりました。実は傍ほうばい輩が言うには、弥一右衛門殿は御先代の御遺言で続いて御奉公なさるそうな。親子兄弟

相変らず揃そろうてお勤めなさる、めでたいことじやと言うのでござります。その詞ことばが何か意味ありげで齒がゆうござりました」

父弥一右衛門は笑った。「そうであろう。目の先ばかり見える近ちかめ眼めどもを相手にするな。そこでその死なぬはずのおれが死んだら、お許しのなかつたおれの子じやというて、おぬしたちを侮あなどるものもあろう。おれの子に生まれたのは運じや。しようことがない。恥を受けるときは一しよに受けい。兄弟喧嘩げんかをするなよ。さあ、瓢箪で腹を切るのをよう見ておけ」

こう言っておいて、弥一右衛門は子供らの面前で切腹して、自分で首筋を左から右へ刺し貫いて死んだ。父の心を測りかねていた五人の子供らは、このとき悲しくはあつたが、それと同時にこ

れまでの不安心な境^{きようがい}界を一步離れて、重荷の一つをおろしたように感じた。

「兄^{あに}き」と二男弥五兵衛が嫡子に言った。「兄弟喧嘩をするなど、お父^とっさんは言いおいた。それには誰も異存はあるまい。おれは島原で持場が悪うて、知行ももらわずにいるから、これからはおぬしが厄^{やっかい}介になるじやろう。じやが何事があつても、おぬしが手にたしかな槍^{やり}一本はあるというものじや。そう思うていてくれい」

「知れたことじや。どうなることか知れぬが、おれがもらう知行はおぬしがもらうも同じじや」こう言ったぎり権兵衛は腕組みをして顔をしかめた。

「そうじゃ。どうなることか知れぬ。追腹はお許しの出た殉死とは違うなぞという奴やつがあろうて」こう言ったのは四男の五太夫である。

「それは目に見えておる。どういう目に逢おうても」こう言いさして三男市太夫は権兵衛の顔を見た。「どういふ目に逢うても、兄弟離れ離れに相手にならずに、固まつて行こうぞ」

「うん」と権兵衛は言ったが、打ち解けた様子もない。権兵衛は弟どもを心にいたわつてはいるが、やさしく物をいわれぬ男である。それに何事も一人で考えて、一人でしたがる。相談というものをめつたにしない。それで弥五兵衛も市太夫も念を押ししたのである。

「兄にいさま方が揃うておいでなさるから、お父っさんの悪口は、うかと言われますまい」これは前髪の七之丞が口から出た。女のような声ではあったが、それに強い信念が籠こもっていたので、一座のものの胸を、暗黒な前途を照らす光明のように照らした。

「どりや。おっ母さんに言うて、女子おなごたちに暇いとまご乞いをさしようか」こう言つて権兵衛が席を起つた。

従四位下侍従兼肥後守光尚の家督相続が済んだ。家臣にはそれぞれ新知、加増、役替やくがえなどがあつた。中にも殉死の侍十八人の家々は、嫡子にそのまま父のあとを継がせられた。嫡子のある限りは、いかに幼少でもその数には漏もれない。未亡びぼうじん人、老父母に

は扶持が与えられる。家屋敷を拝領して、作事までも上^{かみ}からしむけられる。先代が格別入^{じつこん}懇にせられた家柄で、死^し天^{てん}の旅のお供にさえ立ったのだから、家中のものが羨^{うらや}みはしても妬^{ねた}みはしない。

しかるに一種変^{あとめ}った跡目の処分を受けたのは、阿部弥一右衛門の遺族である。嫡子権兵衛は父の跡をそのまま継ぐことが出来ずに、弥一右衛門が千五百石の知行は細^{さい}かに割^わいて弟たちへも配分せられた。一族の知行を合わせてみれば、前に変^あったことはないが、本家を継いだ権兵衛は、小身ものになったのである。権兵衛の肩幅のせまくなつたことは言うまでもない。弟どもも一人一人の知行は殖^ふえながら、これまで千石以上の本家によつて、大木の陰に立っているように思っていたのが、今は橡^{どんぐり}栗の背^せ競^{くら}べに

なつて、ありがたいようでも迷惑な思ひをした。

政道は地道じみちである限りは、咎とがめの帰するところを問うものはない。一 旦いったん常じょうに變つた処置があると、誰たれの捌さばきかという詮議せんぎが起る。当主のお覚えめでたく、お側そば去らずに勤めてゐる大目附役おめつけに、林外記りんがいきというものがある。小才覚せうさいかくがあるので、若殿様時代のお伽とぎには相応あうおうしていたが、物の大体を見ることにおいてはおよばぬところがあつて、とかく苛察かさつに傾かたきたがる男であつた。阿部弥一右衛門は故殿様のお許しを得ずに死んだのだから、眞の殉死者と弥一右衛門との間には境界をつけなくてはならぬと考へた。そこで阿部家の俸禄ほうろく分割の策を献じた。光尚も思慮ある大名ではあつたが、まだ物馴ものなれぬときのこと、弥一右衛門や嫡子権兵衛と懇

意でないために、思いやりがなく、自分の手元に使って馴染みのある市太夫がために加増になるというところに目をつけて、外記の言を用いたのである。

十八人の侍が殉死したときには、弥一右衛門はお側に奉公していたのに殉死しないと云つて、家中のものが卑いやしんだ。さてわずかに二三日を隔てて弥一右衛門は立派に切腹したが、事の当否は措おいて、一旦受けた侮辱は容易に消えがたく、誰も弥一右衛門を褒ほめるものがない。上では弥一右衛門の遺骸いがいを霊屋おたまやのかたわらに葬ることを許したのであるから、跡目相続の上にも強しいて境界を立てずにおいて、殉死者一同と同じ扱いをしてよかつたのである。そうしたなら阿部一族は面めん目ぼくを施して、こそつて忠勤を励んだ。

のであろう。しかるに^{かみ}上で一段下がった扱いをしたので、家中のもの阿部家^{あべつ}侮蔑の念^{おおやけ}が公に認められた形になった。権兵衛兄弟は次第に^{ほうばい}傍輩にうとんぜられて、^{おうおう}怏々として日を送った。

寛永十九年三月十七日になった。先代の殿様の一週忌である。

^{おたまや}霊屋のそばにはまだ^{みょうげじ}妙解寺は出来ていぬが、向陽院という堂^{どう}宇^うが立って、そこに^{いはい}妙解院殿の位牌が安置せられ、^{きようしゆざ}鏡首座という僧^{そう}が住持している。忌日^{きにち}にさきだつて、紫野大徳寺の^{てんゆうおし}天祐和尚^{そう}が京都から^{げこう}下向する。年忌の営みは晴れ晴れしいものにな

るらしく、一箇月ばかり前から、熊本の城下は準備に忙しかった。いよいよ当日になった。うらかな日^{ひより}和で、霊屋のそばは桜の

盛りである。向陽院の周囲には幕を引き廻わして、歩卒が警護し

ている。当主がみずから臨場して、まず先代の位牌に焼香し、ついで殉死者十九人の位牌に焼香する。それから殉死者遺族が許されて焼香する、同時に御紋かみしも上下、同時服じふくを拝領する。馬うま廻り以上は長なが上下、徒士かちは半はん上下である。下々の者は御香ごこう奠でんを拝領する。

儀式はとどこおりなく済んだが、その間にただ一つの珍事が出し来ゆつたいした。それは阿部権兵衛が殉死者遺族の一人として、席順によつて妙解院殿の位牌の前に進んだとき、焼香をして退のきしなに、脇差の小柄こづかを抜き取つて髻もとどりを押し切つて、位牌の前に供えたことである。この場に詰めていた侍どもも、不意の出来事に驚きあきれて、茫ぼうぜん然として見ていたが、権兵衛が何事もないように、

自若^{じじやく}として五六歩退いたとき、一人の侍がようよう我に返つて、「阿部殿、お待ちなされい」と呼びかけながら、追いすがつて押し止めた。続いて二三人立ちかかつて、権兵衛を別間に連れてはいつた。

権兵衛が詰^{つめ}衆^{しゆう}に尋ねられて答えたところはこうである。貴殿らはそれがしを乱心者のように思われるであろうが、全くさよくなわけではない。父弥一右衛門は一生瑕^{かきん}瑾のない御奉公をいたしたればこそ、故殿様のお許しを得ずに切腹しても、殉死者の列に加えられ、遺族たるそれがしさえ他人にさきだつて御位牌に御焼香いたすことが出来たのである。しかしそれがしは不肖にして父同様の御奉公がなりがたいのを、上^{かみ}にもご承知と見えて、知行

を割さいて弟どもにおつかわしなされた。それがしは故殿様にも御当主にも亡き父にも一族の者どもにも傍ほう輩ばいにも面目がない。かように存じているうち、今日御位牌に御焼香いたす場合になり、とつさの間、感慨胸に迫り、いつそのこと武士を棄てようと決心いたしました。お場所柄がらを顧みざるお咎とがめは甘んじて受ける。乱心などはいたさぬというのである。

権兵衛の答を光尚は聞いて、不快に思った。第一に権兵衛が自分に面つら当あてがましい所しよぎ行ようをしたのが不快である。つぎに自分が外記の策を納いれて、しなくてもよいことをしたのが不快である。まだ二十四歳の血気の殿様で、情を抑え欲を制することが足りない。恩をもって怨うらみに報うらいる寛大の心持ちに乏しい。即座に権兵

衛をおし籠めさせた。それを聞いた弥五兵衛以下一族のものは門を閉じて上の御沙汰を待つことにして、夜陰に一同寄り合つては、ひそかに一族の前途のために評議を凝らした。

阿部一族は評議の末、このたび先代一週忌の法会のため、下向して、まだ逗留している天祐和尚にすぎることにした。市太夫は和尚の旅館に往つて一部始終を話して、権兵衛に対する上の処置を軽減してもらうように頼んだ。和尚はつくづく聞いて言った。承れば御一家のお成行きなりゆきの毒千万である。しかし上の御政道に対してかれこれ言うことは出来ない。ただ権兵衛殿に死を賜わるとなつたら、きつと御助命を願つて進ぜよう。ことに権兵衛殿はすでに髻もとどりを払われてみれば、桑門そうもん同様の身の上である。御

助命だけはいかようにも申ししてみようと言った。市太夫は頼もしく思つて歸つた。一族のものは市太夫の復命を聞いて、一条の活路を得たような気がした。そのうち日が立つて、天祐和尚の帰京のときが次第に近づいて来た。和尚は殿様に逢つて話をするたびに、阿部権兵衛が助命のことを折りがあつたら言上しようと思つたが、どうしても折りが無い。それはそのはずである。光尚はこう思つたのである。天祐和尚の逗留中に権兵衛のことを沙汰したらきつと助命を請われるに違いない。大寺の和尚の詞ことばでみれば、なおよ閑ぎりに聞きすてることはなるまい。和尚の立つのを待つて処置しようと思つたのである。とうとう和尚は空むなしく熊本を立つてしまつた。

天祐和尚が熊本を立つや否や、光尚はすぐに阿部権兵衛を井出の口に引き出だして縛しばりくび首くびにさせた。先代の御位牌に対して不敬なことをあえてした、上かみを恐れぬ所行として処置せられたのである。

弥五兵衛以下一同のものは寄り集まって評議した。権兵衛の所行は不埒ふらちには違いない。しかし亡父弥一右衛門はとにかく殉死者のうちうちに数えられている。その相続人たる権兵衛でみれば、死を賜うことは是非ぜひがない。武士らしく切腹仰せつけられれば異存はない。それに何事ぞ、奸盗かんとうかなんぞのように、白昼に縛首にせられた。この様子で推すれば、一族のものも安穩には差しおかれ

まい。たとい別に御沙汰がないにしても、縛首にせられたものの一族が、何の面目あつて、傍輩に立ち交わつて御奉公をしよう。この上は是非におよばない。何事があるうとも、兄弟わかれわれになるなど、弥一右衛門殿の言いおかれたのはこのときのことである。一族討手うってを引き受けて、ともに死ぬるほかはないと、一人の異議を称えるものもなく決した。

阿部一族は妻子を引きまとめ、権兵衛が山崎の屋敷に立て籠こもつた。

おだやかならぬ一族の様子が上かみに聞えた。横目よこめが偵察ていさつに出て来た。山崎の屋敷では門を嚴重に鎖とぎして静まりかえつていた。市太夫や五太夫の宅は空屋になっていた。

討手の手配りが定められた。表門は側者頭、竹内数馬長そばものがしらたけのうちかずまなが
 政が指揮役をして、それに小頭添島九兵衛、同じく野村庄兵衛まぎ
 衛べえがしたがっている。数馬は千百五十石で鉄砲組三十挺の頭でちようかしら
 ある。譜第の乙名島徳右衛門が供をする。添島、野村は当時百石
 のものである。裏門の指揮役は知行五百石の側者頭高見権右衛門
 重政しげまさで、これも鉄砲組三十挺の頭である。それに目附畑十太夫
 と竹内数馬の小頭で当時百石の千場作兵衛とがしたがっている。
 討手は四月二十一日に差し向けられることになった。前晩に山
 崎の屋敷の周囲には夜廻りがつけられた。夜がふけてから侍分の
 ものが一人覆面して、堀へいをうちから乗り越えて出たが、廻役の佐さ
 分利嘉左衛門が組の足軽丸山三之丞さんのじようが討ち取った。そののち夜ぶり

明けまで何事もなかつた。

かねて近隣のものには沙汰があつた。たとい当番たりとも在宿して火の用心を怠らぬようにいたせというのが一つ。討手でないのに、阿部が屋敷に入り込んで手出しをすることは厳禁であるが、おちうど落人は勝手に討ち取れというのが二つであつた。

阿部一族は討手の向う日をその前日に聞き知つて、まず邸内をくま隈なく掃除し、見苦しい物はことごとく焼きすてた。それから老ろうにやく若

若 打ち寄つて酒宴をした。それから老人や女は自殺し、幼いものはてんでに刺し殺した。それから庭に大きい穴を掘つて死骸しかいを埋めた。あとに残つたのは究くつきよう竟の若者ばかりである。弥五兵衛、市太夫、五太夫、七之丞の四人が指図して、障子襖ふすまを取り

払った広間に家来を集めて、鉦かね太鼓たいこを鳴らさせ、高声かこゑに念仏を
 させて夜の明けるのを待った。これは老人や妻子とむらを弔うためだと
 は言ったが、実は下人げにんどもに臆おく病びょうの念を起させぬ用心であつ
 た。

阿部一族の立て籠った山崎の屋敷は、のちに斎藤勘助の住んだ
 所で、向いは山中又左衛門、左右両隣は柄つかもと本又七郎、平山三郎
 の住いであつた。

このうちで柄本が家は、もと天草郡を三分して領していた柄本、
 天草、志岐しきの三家の一つである。小西行長が肥後半国を治めてい
 たとき、天草、志岐は罪を犯して誅ちゆうせられ、柄本だけが残ってい

て、細川家に仕えた。

又七郎は平生阿部弥一右衛門が一家と心安くして、主人同志はもとより、妻女までも互いに往来していた。中にも弥一右衛門の二男弥五兵衛は鎗やりが得意で、又七郎も同じ技わざを嗜たしむところから、親しい中で広言をし合つて、「お手前が上じょうず手でもそれがしにはかなうまい」、「いやそれがしがなんでお手前に負けよう」などと言つていた。

そこで先代の殿様の病中に、弥一右衛門が殉死を願つて許されぬと聞いたときから、又七郎は弥一右衛門の胸中を察して気の毒がつた。それから弥一右衛門の追腹、家督相続人権兵衛の向陽院での振舞い、それがもとなつての死刑、弥五兵衛以下一族の立た

てこも

籠りという順序に、阿部家がだんだん否運に傾いて来たので、又七郎は親身のものにも劣らぬ心痛をした。

ある日又七郎が女房に言いつけて、夜ふけてから阿部の屋敷へ見舞いにやった。阿部一族は上かみに叛そむいて籠城めいたことをしているから、男同志は交通することが出来ない。しかるに最初からの行きがかりを知っていてみれば、一族のものを悪人として憎むことは出来ない。ましてや年来懇意にした間柄である。婦女の身としてひそかに見舞うのは、よしや後日に発覚したとて申しわけの立たぬことでもあるまいという考えで、見舞いにはやったのである。女房は夫の詞ことばを聞いて、喜んで心尽くしの品を取り揃えて、夜ふけて隣へおとずれた。これもなかなか気丈な女で、もし後日

に発覚したら、罪を自身に引き受けて、夫に迷惑はかけまいと思つたのである。

阿部一族の喜びは非常であつた。世間は花咲き鳥歌う春であるのに、不幸にして神仏にも人間にも見放されて、かく籠居ろうきよしてゐる我々である。それを見舞うてやれという夫も夫、その言いつけを守つて来てくれる妻も妻、実にありがたい心がけだと、心しんから感じた。女たちは涙を流して、こうなり果てて死ぬるからは、世の中に誰一人菩提ぼだいを弔とむろうてくれるものもあるまい、どうぞ思ひ出したら、一遍の回向えこうをしてもらいたいと頼んだ。子供たちは門外へ一足も出されぬので、ふだん優しくしてくれた柄本の女房を見て、右左から取りすがつて、たやすく放して帰さなかつた。

阿部の屋敷へ討手の向う前晩になった。柄本又七郎はつくづく考えた。阿部一族は自分と親しい間柄である。それで後日の咎めとがもあろうかとは思いながら、女房を見舞いにまでやった。しかしいよいよ明朝は上の討手が阿部家へ来る。これは逆賊を征伐せられるお上の軍いくさも同じことである。御沙汰には火の用心をせい、手出しをするなど言つてあるが、武士たるものがこの場合にふところ懐手でをして見ていられたものではない。情けは情け、義は義である。おれにはせんようがあると考えた。そこで更こうた闌けて抜き足をして、後ろ口から薄暗い庭へ出て、阿部家との境の竹垣たけがきの結び縄なわをことごとく切つておいた。それから帰つて身支度をして、長な押げしにかけた手槍てやりをおろし、鷹たかの羽の紋の付いた鞆さやを払つて、夜の

明けるのを待っていた。

討手として阿部の屋敷の表門に向うことになった竹内数馬は、

武道の誉れある家に生まれたものである。先祖は細川高国の手に
属して、強弓ごうきゆうの名を得た島村弾正貴則だんじようたかのりである。享祿きようろく

四年に高国が摂津国せつつのくに尼崎あまがさきに敗れたとき、弾正は敵二人を両り

腋よわきに挟はさんで海に飛び込んで死んだ。弾正の子市兵衛は河内の
八隅家やすみけに仕えて一時八隅と称したが、竹内越たけのうちこえを領することに

なつて、竹内たけのうちと改めた。竹内市兵衛の子吉兵衛は小西行長に

仕えて、紀伊国きののくに太田の城を水攻めにしたときの功で、豊臣太閤

に白練しろねりに朱の日の丸の陣羽織をもらった。朝鮮征伐のときには

小西家の人質として、李王宮に三年押し籠められていた。小西家が滅びてから、加藤清正に千石で召し出されていたが、主君と物争いをして白昼に熊本城下を立ち退いた。加藤家の討手に備えるために、鉄砲に玉をこめ、火縄に火をつけて持たせて退いた。それを三斎が豊前で千石に召し抱えた。この吉兵衛に五人の男子があつた。長男はやはり吉兵衛と名のつたが、のち剃髪して八隅見山けんざんといつた。二男は七郎右衛門、三男は次郎太夫、四男は八兵衛、五男がすなわち数馬である。

数馬は忠利の児小姓こせいしょうを勤めて、島原征伐のとき殿様のそばにいた。寛永十五年二月二十五日細川の手のものが城を乗り取ろうとしたとき、数馬が「どうぞお先手さきてへおつかわし下されい」と忠

利に願った。忠利は聴かなかつた。押し返してねだるように願うと、忠利が立腹して、「小倅こせがれ、勝手にうせおれ」と叫んだ。数馬はそのとき十六歳である。「あつ」と言いさま駈け出すのを見送つて、忠利が「怪我をするなよ」と声をかけた。乙名おとな島徳右衛門、草履取ぞうりとり一人、槍持やりもち一人があとから続いた。主従四人である。城から打ち出す鉄砲が烈はげしいので、島が数馬の着ていた猩々緋しょうじょうひの陣羽織すその裾をつかんであとへ引いた。数馬は振り切つて城の石垣に攀よじ登る。島も是非なくついて登る。とうとう城内にはいつて働いて、数馬は手を負つた。同じ場所から攻め入つた柳川の立花ひだのかみむねしげ飛騨守宗茂は七十二歳の古武者ふるつわもので、このときの働きぶりを見ていたが、渡辺新弥なかみつないぜん、仲光内膳あつぱと数馬との三人が天晴れ

であつたと言つて、三人へ連名の感状をやつた。落城ののち、忠利は数馬にせきかねみつ関兼光の脇差をやつて、禄を千百五十石に増加した。脇差は一尺八寸、すぐやき直焼無銘、よこやすり横鑢、銀の九曜のくよう三並びのみつなら目貫、めぬき赤銅縁、しやくどうぶち金拵きんごしらえである。目貫の穴は二つあつて、一つは鉛でう填めてあつた。忠利はこの脇差を秘蔵していたので、数馬にやつてからも、登城のときなどには、「数馬あの脇差を貸せ」と言つて、借りて差したこともたびたびある。

光尚に阿部の討手を言いつけられて、数馬が喜んで詰所へ下がると、ほうばい傍輩の一人がささやいた。

「かんぶつ奸物にも取りえはある。おぬしに表門のさいはい采配を振らせるとは、林殿にしてはよく出来た」

数馬は耳をそばだてた。「なにこのたびのお役目は外記げきが申し上げて仰せつけられたのか」

「そうじゃ。外記殿が殿様に言われた。数馬は御先代が出格のお取立てをなされたものじゃ。ご恩報じにあれをおやりなされいと言われた。もっけの幸いではないか」

「ふん」と言った数馬の眉間みけんには、深い皺しわが刻まれた。「よいわ。討死するまでのことじゃ」こう言い放つて、数馬はついと起つて館やかたを下がった。

このときの数馬の様子を光尚が聞いて、竹内の屋敷へ使いをやつて、「怪我をせぬように、首尾よくいたして参れ」と言させた。数馬は「ありがとうお詞ことばをたしかに承つたと申し上げて下されい」

と言った。

数馬は傍輩の口から、外記が自分を推してこのたびの役に当らせたのだと聞くや否や、即時に討死をしようと思ひ切つた。それがどうしても動かすことの出来ぬほど堅固な決心であつた。外記はご恩報じをさせると言つたということである。この詞ははからず聞いたのであるが、実は聞くまでもない、外記が薦めるには、そう言つて薦めるにきまつている。こう思うと、数馬は立つてもすわつてもいらぬような気がする。自分は御先代の引立てをこうむつたには違ひない。しかし元服をしてからのちの自分は、いわば大勢の近習きんじゆのうちの一人で、別に出色のお扱いを受けてはいない。ご恩には誰も浴している。ご恩報じを自分に限つてしなく

てはならぬというのは、どういう意味か。言うまでもない、自分は殉死するはずであったのに、殉死しなかつたから、命がけの場所にやるといふのである。命は何時でも喜んで棄てるが、さきにしおくれた殉死の代りに死のうとは思わない。今命を惜しまぬ自分が、なんで御先代の中陰の果ての日に命を惜しんだであらう。

いわれのないことである。 ひつきょう 畢 竟 どれだけのご入 じつこん 懇 になつた

人が殉死するという、はつきりした境はない。同じように勤めていた御近習の若侍のうちに殉死の沙汰がないので、自分もながらえていた。殉死してよいことなら、自分は誰よりもさきにする。

それほどのことは誰の目にも見えているように思つていた。それにとうにするはずの殉死をせず^{ごく}にいた人間として いん 極 印 を打たれ

たのは、かえすがえすも口惜しい。自分はすすぐことの出来ぬ汚れを身に受けた。それほどの辱はじを人に加えることは、あの外記でなくては出来まい。外記としてはさもあるべきことである。しかし殿様がなぜそれをお聴きいれになつたか。外記に傷つけられたのは忍ぶことも出来よう。殿様に棄てられたのは忍ぶことが出来ない。島原で城に乗り入ろうとしたとき、御先代が呼び止めなされた。それはお馬廻りのものがわざと先手さきでに加わるのをお止めなされたのである。このたび御当主の怪我をするなどおっしゃるのは、それとは違ふ。惜しい命をいたわれとおっしゃるのである。それがなんのありがたかろう。古い創きずの上を新たに鞭むちうたれるようなものである。ただ一刻も早く死にたい。死んですがれる汚

れではないが、死にたい。犬死でもよいから、死にたい。

数馬はこう思うと、矢も楯たてもたまらない。そこで妻子には阿部の討手を仰せつけられたとだけ、手短てみじかに言い聞かせて、一人ひたすら支度を急いだ。殉死した人たちは皆安堵あんどして死につくという心持ちでいたのに、数馬が心持ちは苦痛を逃れるために死を急ぐのである。乙名島徳右衛門が事情を察して、主人と同じ決心をしたほかには、一家のうちに数馬の心底を汲くみ知ったものがない。今年二十一歳になる数馬のところへ、去年来たばかりのまだ娘らしい女房にようぼうは、当歳の女の子を抱いてうろろうろしているばかりである。

あすは討入りという四月二十日の夜、数馬は行水を使って、月さ

かやき
 題を剃つて、髪には忠利に拝領した名香初音を焚き込めた。白
ろむく
 無垢に白しろだすき襷、白鉢巻をして、肩に合あいじるし印の角取紙をつ
 けた。腰に帯びた刀は二尺四寸五分の正盛まさもりで、先祖島村弾正が
 尼崎で討死したとき、故郷に送った記念である。それに初陣ういじんの
 時拝領した兼光を差し添えた。門口には馬がいななっている。
 手槍を取つて庭に降り立つとき、数馬は草鞋わらじの緒を男おとこむす結び
 にして、余つた緒を小刀で切つて捨てた。

阿部の屋敷の裏門に向うことになつた高見権右衛門はもと和田
おうみのくに
 氏で、近江国和田に住んだ和田但馬守たじまのかみの裔すえである。初め蒲がもう
かたひで
 生賢秀にしたがつていたが、和田庄五郎の代に細川家に仕えた。

庄五郎は岐阜、関原の戦いに功のあつたものである。忠利の兄与一郎ただたか忠隆の下についていたので、忠隆が慶長五年大阪で妻前田氏の早く落ち延びたために父の勘気を受け、入道休きゆうむ無となつて流浪したとき、高野山こうやさんや京都まで供をした。それを三斎が小倉へ呼び寄せて、高見氏を名のらせ、番頭ばんがしらにした。知行五百石であつた。庄五郎の子が権右衛門である。島原の戦いに功があつたが、軍令にそむいた廉かどで、一旦役を召し上げられた。それがしばらくしてから帰参して側者頭そばものがしらになつていたのである。権右衛門は討入りの支度するとき黒羽二重の紋附きを着て、かねて秘蔵していた備前長船おさいふねの刀を取り出して帯びた。そして十文字の槍を持つて出た。

竹内数馬の手に島徳右衛門がいるように、高見権右衛門は一人の小姓を連れている。阿部一族のこのあつた二三年前の夏の日、この小姓は非番で部屋に昼寝をしていた。そこへ相役の一人が供先から帰つて真まはだか裸になつて、手桶ておけを提さげて井戸へ水を汲みに行きかけたが、ふとこの小姓の寝ているのを見て、「おれがお供から帰つたに、水も汲んでくれずに寝ておるかい」と言いざまに枕を蹴けつた。小姓は跳はね起きた。

「なるほど。目がさめておつたら、水も汲んでやろう。じゃが枕を足蹴にするということがあるか。このままには済まんぞ」こう言つて抜打ちに相役を大袈裟おおげさに切つた。

小姓は静かに相役の胸の上にまたがって止めを刺して、乙名の

小屋へ行つて仔細しさいを話した。「即座に死ぬるはずでござりましたが、ご不審もあろうかと存じまして」と、肌はだを脱いで切腹しようとした。乙名が「まず待て」と言つて権右衛門に告げた。権右衛門はまだ役所から下がつて、衣服も改めずもつとにいたので、そのまま館やかたへ出て忠利に申し上げた。忠利は「尤ものことじゃ。切腹にはおよばぬ」と言つた。このときから小姓は権右衛門に命を捧げて奉公しているのである。

小姓は箆えびらを負い半弓を取つて、主のかたわらに引き添つた。

寛永十九年四月二十一日は麦秋むぎあきによくある薄曇りの日であつた。

阿部一族の立て籠っている山崎の屋敷に討ち入ろうとして、竹内数馬の手のものはふつぎよう 扨 暁に表門の前に来た。夜通しかねたいこ 鉦太鼓を鳴らしていた屋敷のうちが、今はひっそりとして空家かと思われるほどである。門の扉は鎖してある。板扉の上に二三尺伸びているきようちくとう 夾竹桃の木末には、蜘蛛のいがかかっている、それが夜露が真珠のように光っている。つばめ 燕が一羽どこから飛んで来て、つと扉のうちに入った。

数馬は馬を乗り放って降り立って、しばらく様子を見ていたが、「門をあけい」と言った。足軽が二人扉を乗り越してうちにはいなかった。門の廻りには敵は一人もいないので、錠前を打ちこわして貫かんの木を抜いた。

隣家の柄本又七郎は数馬の手のものが門をあける物音を聞いて、前夜結び縄を切っておいた竹垣を踏み破って、駈け込んだ。毎日のように往ゆき来きして、隅すみ々ずみまで案内を知っている家である。手槍を構えて台所の口から、つとはいった。座敷の戸を締め切って、籠こみ入る討手のものを一人一人討ち取ろうとして控えていた一族の中で、裏口に人のけはいのするのに、まず気のついたのは弥五兵衛である。これも手槍を提げて台所へ見に出た。

二人は槍の穂先と穂先とが触れ合うほどに相對した。「や、又七郎か」と、弥五兵衛が声をかけた。

「おう。かねての広言がある。おぬしが槍の手並みを見に来た」「ようわせた。さあ」

二人は一步しぎって槍を交えた。しばらく戦ったが、槍術は又七郎の方が優れていたのので、弥五兵衛の胸板をしたたかにつき抜いた。弥五兵衛は槍をからりと棄てて、座敷の方へ引こうとした。「卑怯^{ひきよう}じゃ。引くな」又七郎が叫んだ。

「いや逃げはせぬ。腹を切るのじゃ」言いすてて座敷にはいった。その刹那^{せつな}に「おじ様、お相手」と叫んで、前髪の七之丞が電光のごとくに飛んで出て、又七郎の太股^{ふともも}をついた。入懇^{じっこん}の弥五兵衛に深手を負わせて、覚え^{ゆる}ず気が弛^{ゆる}んでいたのので、手錬の又七郎も少年の手にかかったのである。又七郎は槍を棄ててその場に倒れた。

数馬は門内に入って人数を屋敷の隅々に配った。さて真つ先に

玄関に進んでみると、正面の板戸が細目にあけてある。数馬がその戸に手をかけようとする、島徳右衛門が押し隔てて、詞せわしくささやいた。

「お待ちなさりませ。殿は今日の総大将じゃ。それがしがお先をいたします」

徳右衛門は戸をがらりとあけて飛び込んだ。待ち構えていた市太夫の槍に、徳右衛門は右の目をつかれてよろよろと数馬に倒れかかった。

「邪魔じゃ」数馬は徳右衛門を押し退けて進んだ。市太夫、五太夫の槍が左右のひわらをつき抜いた。

添島九兵衛、野村庄兵衛が続いて駆け込んだ。徳右衛門も痛手

に屈せず取つて返した。

このとき裏門を押し破つてはいつた高見権右衛門は十文字槍をふるつて、阿部の家来どもをつきまくつて座敷に來た。千場ちば作兵衛も続いて籠こみ入つた。

裏表二手のものどもが入り違えて、おめき叫んで衝ついて來る。

障子襖は取り払つてあつても、三十畳に足らぬ座敷である。市街戦の惨状が野戦よりはなはだしいと同じ道理で、皿さらに盛られた百ひやくちゆうの相啖あいくらうにもたとえつべく、目も当てられぬありさまである。

市太夫、五太夫は相手きらわず槍を交えているうち、全身に数えられぬほどの創きずを受けた。それでも屈せずに、槍を棄てて刀を

抜いて切り廻っている。七之丞はいつのまにか倒れている。

太股ふとももをつかれた柄本又七郎が台所に伏していると、高見の手

のものが見て、「手をお負おいなされたな、お見事じゃ、早うお引きなされい」と言つて、奥へ通り抜けた。「引く足があれば、わしも奥へはいるが」と、又七郎は苦々しげに言つて齒咬はがみをした。そこへ主のあとを慕つて入り込んだ家来の一人が駈けつけて、肩にかけて退いた。

今一人の柄本家の被官ひかん天草平九郎というものは、主の退きの口くちを守つて、半弓をもつて目にかかる敵を射ていたが、その場で討死した。

竹内数馬の手では島徳右衛門がまず死んで、ついで小頭添島九

兵衛が死んだ。

高見権右衛門が十文字槍をふるって働く間、半弓を持った小姓はいつも槍脇やりわきを詰めて敵を射ていたが、のちには刀を抜いて切つて廻つた。ふと見れば鉄砲で権右衛門をねらっているものがある。

「あの丸たまはわたくしが受け止めます」と言つて、小姓が権右衛門の前に立つと、丸が来てあつた。小姓は即死した。竹内の組から抜いて高見につけられた小頭千場作兵衛は重手おもてを負つて台所に出て、水瓶みずかめの水を呑んだが、そのままそこにへたばつていた。

阿部一族は最初に弥五兵衛が切腹して、市太夫、五太夫、七之丞はどうとう皆深手に息が切れた。家来も多くは討死した。

高見権右衛門は裏表の人数を集めて、阿部が屋敷の裏手にあつた物置小屋を崩くずさせて、それに火をかけた。風のない日の薄曇りの空に、煙がまっすぐにのぼって、遠方から見えた。それから火を踏み消して、あとを水でしめして引き上げた。台所にいた千場作兵衛、そのほか重手を負つたものは家来や傍輩が肩にかけて続いた。時刻はちようど未ひつじの刻であつた。

光尚はたびたび家中のおもだつたものの家へ遊びに往くことがあつたが、阿部一族を討ちにやつた二十一日の日には、松野左京の屋敷へ払ふつぎ暁ようから出かけた。

やかた館のあるお花はな 畠はなばたけからは、山崎はすぐ向うになつていたので、

光尚が館を出るとき、阿部の屋敷の方角に人声物音がするのが聞こえた。

「今討ち入ったな」と言つて、光尚は駕籠かごに乗つた。

駕籠がようよう一町ばかりいったとき、注進があつた。竹内数馬が討死をしたことは、このときわかつた。

高見権右衛門は討手の総勢を率いて、光尚のいる松野の屋敷の前まで引き上げて、阿部の一族を残らず討ち取つたことを執奏してもらつた。光尚はじきに逢おうと言つて、権右衛門を書院の庭に廻らせた。

ちようど卯うの花の真つ白に咲いている垣かきの間に、小さい枝折戸しおりどのあるのをあけてはいつて、権右衛門は芝生の上に突居ついでた。光尚

が見て、「手を負ったな、一段骨折りであつた」と声をかけた。
くろはぶたえ黒羽二重の衣服が血みどれになつて、それに引上げのとき小屋の
火を踏み消したとき飛び散つた炭や灰がまだらについていたので
ある。

「いえ。かすり創きずでござりまする」権右衛門は何者かに水落みずおちを
したたかつかれたが懐中していた鏡にあたつて穂先がそれた。創
はわずかに血を鼻紙ににじませただけである。

権右衛門は討入りのときのめいめいの働きをくわしく言上して、
第一の功を単身で弥五兵衛に深手を負わせた隣家の柄本又七郎に
譲つた。

「数馬はどうじゃつた」

「表門から一足先に駆け込みましたので見届けません」

「さようか。皆のものに庭へはいれと言え」

権右衛門が一同を呼び入れた。重手おもてで自宅へ昇かいて行かれた人たちのほかは、皆芝生に平伏した。働いたものは血によごれている、小屋を焼く手伝いばかりしたものは、灰ばかりあびている。その灰ばかりあびた中に、畑十太夫がいた。光尚が声をかけた。

「十太夫、そちの働きはとうじやつた」

「はっ」と言つたぎり黙つて伏していた。十太夫は大だいひょう兵の臆

病者で、阿部が屋敷の外をうろついでいて、引上げの前に小屋に火をかけたとき、やつとおずおずはいつたのである。最初討手しんめんむさしを仰せつけられたときに、お次へ出るところを劍術者新免武蔵が

見て、「冥加みよが至極しごくのことじゃ、ずいぶんお手柄をなされい」と言つて背中をぼんと打つた。十太夫は色を失つて、ゆるんでいた袴はかまひもの紐を締め直そうとしたが、手がふるえて締まらなかつたそうである。

光尚は座を起つとき言つた。「皆出精しゅっせいであつたぞ。歸つて休息いたせ」

竹内数馬の幼い娘には養子をさせて家督相続を許されたが、この家はのちに絶えた。高見権右衛門は三百石、千場作兵衛、野村庄兵衛は各五十石かくの加増を受けた。柄本又七郎へは米田こめだけんもつ監物が承つて組頭谷内蔵之允たにくらのすけを使者にやつて、賞詞ほめことばがあつた。親しんせ

戚朋友きほうゆうがよろこびを言いに来ると、又七郎は笑つて、「元龜げんき

天正のころは、城攻め野合せが朝夕の飯同様であつた、阿部一族討取りなぞは茶の子の茶の子の朝茶の子じゃ」と言つた。二年立つて、正保元年の夏、又七郎は創いが癒えて光尚にはいえつ拝謁した。光尚は鉄砲十挺を預けて、「創が根治するように湯治がしたくばいたせ、また府外に別荘地をつかわすから、場所を望め」と言つた。又七郎は益城ましき小池村に屋敷地をもらった。その背後が藪山やぶやまである。「藪山もつかわそうか」と、光尚が言わせた。又七郎はそれを辞退した。竹は平日もご用に立つ。戦争でもあると、竹束がたぐさくさんいる。それを私わたくしにえいたいおあず拝領しては気が済まぬというのである。そこで藪山は永代御預けえいたいおあずということになつた。

畑十太夫は追放せられた。竹内数馬の兄八兵衛は私に討手に加わりながら、弟の討死の場所に居合わせなかつたので、閉門を仰せつけられた。また馬廻りの子で近習を勤めていた某は、それがし阿部の屋敷に近く住まっていたので、「火の用心をいたせ」と言つて当番をゆるされ、父と一しよに屋根に上がつて火の子を消していた。のちにせつかく当番をゆるされた思おぼしめ召しにそむいたと心づいてお暇いとまを願つたが、光尚は「そりや臆病ではない、以後はもう少し気をつけるがよいぞ」と言つて、そのまま勤めさせた。この近習は光尚の亡くなつたとき殉死した。

阿部一族の死骸は井出の口に引き出して、吟味せられた。白川で一人一人の創を洗つてみたとき、柄本又七郎の槍に胸板をつき

抜かれた弥五兵衛の創は、誰の受けた創よりも立派であつたので、又七郎はいよいよ面目を施した。

大正二年一月

青空文庫情報

底本：「日本の文学 3 森鷗外（二）」中央公論社

1972（昭和47）年10月20日発行

入力：真先芳秋

校正：進恵子

2000年2月14日公開

2006年5月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

阿部一族

森鷗外

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>